

(城西人文研究第17巻第1号)

【研究ノート】

井泉水編『一茶俳句集』入集の句 (六)

黄色 瑞華

凡例

- 一 一行めに、井泉水編『一茶俳句集』の本文をおく。ただし、漢字は現行文字とし、ルビは省略した。
- 二 二行めに、出典を示し、句帳・紀行などは()内にそれが記されている条の年月を示した。年号は改元の月日にかかわらず元年一月からとした。
- 三 原本と表記が異なるものは、出典の次の④に原本のそれを示した。
- 四 注は、「前書」の異同と、他書との異同を示すにとどめた。
- 五 原典は、主として一茶全集本により、『浅黄空』などは一茶叢書本その他によった。また、『八番日記』は風間本により、特に異同がある場合、梅塵本と対照した。

秋 (承前)

秋風

秋風や水かさ定る大井川 (寛政五年)

出典 寛政句帳 (寛政5)

㊦ 『一茶俳句集』、「定」に「きま」とルビ。

大根の二葉うれしや秋の風 (享和三年)

出典 享和句帳 (享和3・7)

㊦ 中七「二葉にうれし」。同句帳 (3・7)、中七「二葉にうれし」。

秋風や手染手をりの小ふり袖 (文化元年)

出典 文化句帳 (文化1・7)

㊦ 中七「手染手をりの」。

秋風や仏に近き年の程 (文化五年)

出典 文化五・六年句日記 (文化5・7)

㊦ 七月九日の条、「老婆卅三年忌迫夜有」として、「ことし八月十四日、老婆卅三回忌なれば、」ではじまる小文に付す三句中の第一句。

わらでゆふ髪もめでたし秋の風 (文化五年)

出典 文化五・六年句日記 (文化6・8)

秋風や壁のへまムシヨ入道 (文化八年)

出典 七番日記 (文化8・8)

秋風や皮を剥れしかんばの木 (文化八年)

出典 七番日記 (文化8・8)

㊦ 座五「カンバの木」。前掲句の直前に出。『一茶俳句集』、「剥」に「むか」とルビ。七番日記 (14・7)・希杖本句集、中七以下「裸にされしかんばの木」。

秋の風一茶心に思ふやう（文化八年）

出典 七番日記（文化8・7）・我春集（文化8）

牛の子の旅に立也秋の風（文化八年）

出典 我春集（文化8・7）

秋風に歩行て逃る螢哉（文化10）

出典 七番日記（文化10・8）・八番日記（文政2・7）・おらが春・志多良・嘉永版発句集

㊤ 八番日記・おらが春、中七以下、「歩て逃る螢かな」。

病後

かな釘のやうな手足を秋の風（文化十年）

出典 句稿消息（文化10）・志多良（文化10）・一茶翁終焉記・文政版発句集・嘉永版発句集

㊤ 句稿消息、上五「鉄釘の」。志多良、「桂好亭にわづらふこと七十五日にして、九月五日といふに銘にすがりて、」に始まる小文に、この句を添える。

うそり山、奥州也

秋風や我うしろにもうそり山（文化十二年）

出典 七番日記（文化12・3）

㊤ 七番日記、この句の右肩に「ウソリ山、奥州也」と注を付す。「ウソリ山」は、恐山。

高井野の高みに上りて

秋風や磁石にあてる古郷山（文政二年）

出典 八番日記（文政2・9）・おらが春・文政版発句集・嘉永版発句集

㊦ 八番日記、前書「旅」。

さと女三十五日

秋風やむしりたがりし赤い花 (文政二年)

出典 おらが春

㊦ おらが春、前書「さと女卅五日 墓」。文政版発句集・嘉永版発句集、前書「さと女三十五日」、中七「むしり残りの」。

淋しさに飯をくふ也秋の風 (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・9)・発句鈔追加・梅塵抄録本一茶連句集

㊦ 文政句帳、中七「味をくふ也」。発句鈔追加、上五・中七「さびしさに飯を喰なり」。梅塵抄録連句集(一茶・素外・梅堂・梅塵、四吟歌仙)、上五・中七「淋しさに飯を喰ふなり」。

野分

恒際の洗足鹽野分哉 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・7)

㊦ 中七「足洗鹽」。『一茶俳句集』、「洗足」に「せんそく」とルビ。

ぼつくと馬の爪切る野分哉 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・9)

汁なべの夕暮かかる野分哉 (文化元年)

出典 文化句帳(文化3・8)

㊦ 中七「夕暮かゝる」。

小簾や蠅よけ草の野分吹 (文化八年)

出典 七番日記(文化8・8)

裸児と鳥とさわぐ野分哉 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・8)

㊤ 中七「鳥とさわぐ」。

野分して見事に暮るる焚火かな (文化十三年)

出典 未詳

露

露けさや石の下より草の花 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・6)

㊤ 前書「焼山の山やけ」。

露はらりく世の中よりかりけり (文化九年)

出典 七番日記(文化9・7)

㊤ 中七「く世の中」中。

露時雨如意りんさまも物や思ふ (文化九年)

出典 七番日記(文化9・7)

㊤ 前掲句の直前に出。

越後馬夜露払て通りけり (文化十年)

出典 七番日記(文化10・7)

白露や茶腹で越るうつの山 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・7)

わらちながら墓参して

息才で御目にかかるぞ草の露 (文化十四年)

出典 七番日記(文化14・7)・文政版発句集・嘉永版発句集

㊤ 七番日記、前書「わらちながら墓参」。文政版発句集、前書「わらちながら墓参りして」。嘉永版発句集、前書「草鞋ながら墓参りして」。中七はいずれも「御目にかゝるぞ」。

終に六月二十一日の薨の花と共に、此世をしほみぬ、母は死顔にすがりてよゝと泣もむべなるかな、この期に及んでは、行水のふたゝび帰らず、散る花の梢にもどらぬくひ事などと、あきらめ顔しても、思ひ切りがたきは恩愛のきつなりけり。

露の世はつゆの世ながらさりながら (文政二年)

出典 おらが春

㊤ 句の前に掲げる小文は、『おらが春』第十四話前段の末尾。「よゝと泣も」は、「よゝく」と泣も」が正しい。七番日記(14・5)、前書「悼」、中七以下「得心ながらさりながら」。

世話しなの夜や上る露下る露 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・7)・だん袋

㊤ 八番日記、「上ル露下ル露」。発句鈔追加、中七以下「世や下る露上る露」。

草刈や火を打こぼす露の原 (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・8)

稲妻

稲妻やうつかりひよんとした貌へ (文化十一年)

出典 七番日記 (文化11・8)・希杖本句集・文政版発句集・嘉永版発句集

㊤ 希杖本、上五「稲づまや」。

稲妻にへなへな橋を渡りけり (文政二年)

出典 八番日記 (文政2・7)

㊤ 中七「へな／＼橋を」。

稲妻や畠の中の風呂の人 (文政五年)

出典 文政句帳 (文政5・6)

霧

秋霧や河原なでしこ見ゆる迄 (文化元年)

出典 文化句帳 (文化1・8)・発句鈔追加

㊤ 連句稿裏書、座五「りんとして」。稿本発句題叢・希杖本句集、座五「ばつと咲」。

秋霧やあさぢを通る水戸肴 (文化元年)

出典 文化句帳 (文化1・9)

㊤ 中七「あさぢを過る」。

軽井沢

有明や浅間の霧が膳をはふ (文化九年)

出典 七番日記 (文化9・7)・株番・文化七年七月二十二日付西原文虎あて書簡

㊤ 七番日記・文虎あて書簡、前書なし。株番、座五「膳を這ふ」。

夕霧や馬の覚えし橋の穴 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・9)・おらが春

㊤ 八番日記、中七「馬の覚^(を)し」。おらが春、中七「馬の覚^(を)へし」。

秋の山

秋の山活て居るとてうつ鉦か (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・8)

㊤ 中七「活て居とて」。

秋の山一つ／＼に夕哉 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・8)

㊤ 中七「二ツ／＼に」。

明神の猿遊ぶや秋の山 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・8)

孟蘭盆

入らば今ぞ草葉の陰も花に花 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・7)

㊤ 中七「草葉〔の〕陰も」。

魂祭

魂棚や則吾もかりの宿 (寛政五年)

出典 寛政句帳(寛政5)

二足まで赤い草履を玉迎 （文化元年）

出典 文化句帳（文化1・7）

㊤ 上五「二足迄」。

玉棚や上座して鳴きりぎりす （文化十一年）

出典 七番日記（文化11・7）・稿本発句題叢・希杖本句集・近世発句類題集・文政版発句集・嘉永版発句集

㊤ 希杖本句集、上五「玉棚や」聖霊とと二案併記。座五はいずれも「きりぐす」。

抱た子や母が来る迎鉦たたく （文政八年）

出典 文政句帳（文政8・7）

㊤ 中七以下「母が来るとて鉦たたく」。

門 火

迎ひ火は草のはづれのはづれ哉 （文化五年）

出典 文化五・六年句日記（文化6・7）・発句鈔追加・嘉永版発句集

㊤ 稿本発句題叢、上五「迎火が」。希杖本句集、上五「送り火は」。

送り火やばたりと消てなつかしき （文化八年）

出典 七番日記（文化8・7）

燈 籠

燈籠や木がかぶさりて又見ゆる （文化五年）

出典 文化五・六年句日記（文化6・7）

㊤ 上五「灯ろ」「ろ」や」。

なまなかに消きりもせぬ燈籠哉 (文化五年)

出典 文化五・六年句日記 (文化6・7)

㊤ 座五「灯る哉」。

とふろふも下山にかかるあたご哉 (文政三年)

出典 八番日記 (文政3・4)

㊤ 風間本、上五「とふろふも」、中七「下山にかゝる」。梅塵本、上五「蟬螂も」、中七以下「下山にかゝる愛宕哉」。『一茶俳句集』は、「蟬螂」を「燈籠」と誤る。

大文字

大文字のがつくりきへや東山 (文政八年)

出典 文政句帳 (文政8・9)

草市

草市と申せば風の吹にけり (文化三年)

出典 文化句帳 (文化3・7)

踊

六十年踊る夜もなく過しけり (文政五年)

出典 文政句帳 (文政5・7)

踊る夜やさそひ出されし庵の笠 (文政五年)

出典 文政句帳 (文政5・8)・文政五年七月二十九日付松木可厚あて書簡

七夕

涼しさは七夕雲とゆふべ哉 (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・7)

七夕に我奉る蚊やりかな (文化五年)

出典 文化五・六年句日記(文化6・7)・発句鈔追加

ふんどしに笛つつさして星迎 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・7)・稿本発句題叢・希杖本句集・発句鈔追加・嘉永版発句集

㊤ 七番日記・希杖本句集・発句鈔追加、中七「笛つゝさして」。稿本発句題叢、「禪ニ笛突さしてほし迎ひ」。嘉永版発句集、「禪に笛つきさして星むかひ」。

七夕や野も女郎花男へし (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・7)

御射山祭

へし折し芒のはしも祭哉 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・7)・発句鈔追加

㊤ 八番日記、前書「みさ山」、座五「祭り哉」。発句鈔追加、前書「御射山」、座五「祭りかな」。

御祭やびらうどの牛銀すすき (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・3)

㊤ 中七以下「ビラウドの牛銀すすき」。

駒引

草くれてさらばさらばよ駒の主 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・8)

② 中七「さらばくよ」。

花 火

しばらくは湖一ぱいの花火哉 (寛政一年)

出典 寛政紀行書込(寛政7)

② 上五「しばらく」「は」、座五「玉火哉」。

川上にしばし里ある花火哉 (寛政一年)

出典 寛政紀行書込(寛政7)

② 座五「花」火哉。

角 力

けふぎりの入日さしけり勝角力 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・8)

角力とりや親の日といふ草の花 (文化八年)

出典 七番日記(文化8・7)

うす闇き角力太鼓や角田川 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・7)

角力とりやはるばる来ぬる親の塚 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・7)・希杖本句集

② 七番日記、中七「はるく来る」。希杖本句集、上五・中七「角力とりはるく来る」。

べつたりと人のなる木や宮角力 (文化十四年)

出典 七番日記 (文化14・8)・希杖本句集・文政版発句集・嘉永版発句集

案山子

昼飯をぶらさげて居るかし哉 (文化十三年)

出典 七番日記 (文化13・閏8)・希杖本句集

㊤ 七番日記、座五「かゝし哉」。希杖本句集、中七以下「ぶら下て居るかゝし哉」。

姨捨はあれに候とかかし哉 (文政元年)

出典 七番日記 (文政1・8)・稿本発句題叢・希杖本句集・文政版発句集・嘉永版発句集

㊤ 七番日記・稿本発句題叢、座五「かゝし哉」。希杖本句集・文政版発句集・嘉永版発句集、座五「かゝしかな」。文政句帳 (文政6・7)、座五「夕かゝし」。

名所の月見てくらすかし哉 (文政四年)

出典 八番日記 (文政4・9)

㊤ 座五「かゝし哉」。

芥火にかかしもつひのけぶり哉 (文政四年)

出典 八番日記 (文政4・9)・発句鈔追加

㊤ 中七「かゝしもつひの」。発句鈔追加、中七「案山子も終の」。文政句帳 (文政7・12)、「目出度さやかゝしもつひの夕けぶり」。

人はいざ直な案山子もなかりけり (文政版発句集)

出典 文政版発句集・嘉永版発句集

㊤ 嘉永版発句集、中七「直なかゝしも」。

鳴子

鳴子から先へぬれけり窓の雨 (文化二年)

出典 文化句帳(文化1・9)

㊤ 座五「窓」の「雨」。

初時雨来れく^くと鳴子哉 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・7)

四海波しづかにかかる鳴子哉 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・7)

㊤ 中七「しづかにかかる」。文化句帳(文化2・閏8)、中七以下「しづかに暮るなるみ哉」。

寝咄の足でおりく^く鳴子哉 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・8)

㊤ 中七「足でおりく^(を)」。

落し水

落し水魚も古郷へもどる哉 (寛政五年)

出典 寛政句帳(寛政5)

㊤ 上五「落水」。

水落ちて田はことく^く夕哉 (文化五年)

出典 文化五・六年旬日記(文化6・7)

㊤ 上五「水落て」。

おとし水おさらばさらばさらば哉 (文政元年)

出典 七番日記 (文政1・9)

㊤ 中七以下「おさらばくく哉」。

砧

山本やきぬたに交る紙碇 (寛政四年)

出典 寛政句帳 (寛政4)

穢多町も夜はうつくしき砧かな (文化元年)

出典 文化句帳 (文化1・9)

㊤ 座五「砧哉」。文化句帳 (1・9)、上五「ちり塚も」(別案)。

みちのくの鬼の栖も砧哉 (文化二年)

出典 文化句帳 (文化2・閏8)

小夜砧とばかり寝るももつたいな (文化七年)

出典 七番日記 (文化7・8)

㊤ 中七「とばかり寝も」。

君が代や牛かひが笛小夜砧 (文化七年)

出典 七番日記 (文化7・8)

古郷や寺の砧も夜の雨 (文化七年)

出典 七番日記 (文化7・8)

草の戸も衣打石はありにけり (文化十三年)

出典 七番日記（文化13・9）

㊤ 上五「草戸も」。七番日記（13・12）、座五「持にけり」。

梟が拍子とる也小夜ぎぬた（文政二年）

出典 八番日記（文政2・9）・嘉永版発句集

行燈を畑にすへて砧かな（文政二年）

出典 梅塵本八番日記（文政2）

㊤ 中七「畑に居^あへて」。嘉永版発句集、中七「畑に置いて」。

近砧遠砧さて雨夜かな（しだら）

出典 希杖本句集

柚味噌

鶯もひよいと来て鳴く柚みそ哉（文化三年）

出典 文化句帳（文化3・9）

ことし米我等が小菜も青みけり（文政一年）

出典 稿本発句題叢（文政3以前）・近世発句類題集（文政3）・希杖本句集・発句鈔追加・嘉永版発句集

㊤ 『一茶俳句集』季題「新米」脱。しかも、「鶯も」（前掲）とともに「柚味噌」の項に置く。

新酒

松苗も風の吹く夜のしん酒哉（文化元年）

出典 文化句帳（文化1・8）

杉の葉を添えて配りし新酒哉（文政七年）

出典 文政句帳(文政7・閏8)

㊤ 中七「添へて配りし」。

鹿

鹿鳴や日は暮きらぬ山の家 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・8)

㊤ 上五「鹿鳴くや」。

足枕手枕鹿のむつまじや (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・8)・稿本発句題叢・希杖本句集・文政版発句集・嘉永版発句集

山小屋や笛としりつつ鹿の声 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・9)

㊤ 前書「鹿笛」、中七「笛としりつつ」。

さをしかや片膝立て山の月 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・9)

㊤ 文政句帳(文政8・9)、上五「さをしか[や]」、座五「月見哉」。全集本、上五「さをしか[の]」。

鹿鳴や百八燈のふつ消る (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・9)

さをしかの外も茶がゆの名所哉 (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・7)

㊤ 前書「南都」(句の上白に記す)。

啄木鳥

木つつきや一つ所に日の暮るる (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・7)

② 「木つゝきや一ツ所に日の暮るゝ」。文化句帳(2・8)、中七「人より跡に」。

鵲

鵲の声かんにん袋切れたりな (文政二年)

出典 八番日記(文政2・9)・おらが春

② 八番日記、中七「か〔ん〕にん袋」。七番日記(11・秋)、座五「破れたか」。八番日記(2・9)、座五「どふきぬた」。
発句鈔追加、中七以下「勘忍袋されにけり」。

義経の腰かけ松や鵲の声 (文政六年)

出典 文政句帳(文政6・5)

鳴

つくぐくと鳴我を見る夕べ哉 (寛政——年)

出典 寛政紀行書込(寛政7)

② 寛政紀行(寛政(7・4)、中七以下「鵲ににらま〔る〕ゝ鵲飼哉」。

立鳴の今にはじめぬけぶり哉 (享和二年)

出典 享和二年句日記(享和2)

② 享和二年句日記、座五「ゆふべ哉」(別案、重出)。文政版発句集・嘉永版発句集、座五「夕かな」。

三味線で鳴を立たする潮来哉 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・9)

㊤ 上五「三味絃で」。文政句帳(文政7・12)、中七「鳴を立せる」。

雁

雁なくや平家時分の浜の家 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・7)

雁鳴や窓の蓋する片山家 (文化四年)

出典 連句稿裏書(文化4・7)

暮行や雁とけぶりと膝がしら (文化七年)

出典 七番日記(文化7・9)

初雁やあてにして来る庵の畠 (文化八年)

出典 七番日記(文化8・7)・我春集・嘉永版発句集

㊤ 七番日記・我春集、上五「はつ雁や」。

雁鳴くや霧の浅間へ火を焚くと (文化九年)

出典 七番日記(文化9・8)

㊤ 上五「雁鳴や」、座五「焚と」。

けふからは日本の雁ぞ楽に寝よ (文化九年)

出典 七番日記(文化9・8)・株番・稿本発句題叢・近世発句類題集・あとまつり・文政版発句集・嘉永版発句集

㊤ 株番・あとまつり・文政版発句集・嘉永版発句集、前書「外ヶ浜」。希杖本句集、前書「外ヶ浜」、上五「これからは」。

鳴な雁とつこも同じうき世ぞや (文化十年)

出典 七番日記(文化10・9月10月の部)

㊤ 句稿消息(文化10・10)、中七「どつこも茨の」。七番日記(文化14・11)、中七以下「どつこも旅寝の秋の月」。

雁鳴や浅黄に暮るるちちぶ山 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・8)

㊦ 中七以下「浅黄に暮るるちちぶ山」。

なくな雁けふから我も旅人ぞ (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・8)

はつ雁や同行五人善光寺 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・7)

雁鳴やなんなく碓井越たりと (文政二年)

出典 八番日記(文政2・9)

初雁の三羽も竿と成にけり (文政二年)

出典 八番日記(文政2・8)・嘉永版発句集

㊧ 嘉永版発句集、座五「なりにけり」。

木母寺の古き夕や芦に雁 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・8)

㊨ 梅塵本八番日記(文政2)、座五「芦に鶴」。

雁が菜ものけて置たぞ其畑 (文政九年)

出典 文政九・十年句帳写(文政9Ⅱ重出)・梅塵抄録連句集(一茶・梅塵両吟歌仙)・文政九年九月十七日付太笈あて

書簡・希杖本句集・発句鈔追加

⑤ 書簡、中七「のけておいたぞ」。希杖本句集、座五「その畑」。

渡り鳥

どう追れても人里を渡り鳥 (文政二年)

出典 八番日記 (文政2・12)・おらが春・文政三年九月十四日付大川斗圍あて書簡

⑥ 八番日記、上五・中七「ど^う追れても人^里を」。書簡、座五「わたり鳥」。

小雀

生役やあんな小雀も旅かせぎ (文政九年)

出典 文政九・十年句帳写 (文政9)・希杖本句集

⑦ 文政九年九月十七日付太筈あて書簡、座五「里かせぎ」(前掲「雁が菜も」の直前に出)。

鵪鶉

鵪鶉やいかにも古き池の形 (歌仙)

出典 茶翁聯句集(一茶・文木・竜卜三吟歌仙II年代未詳)・発句鈔追加

⑧ 発句鈔追加、中七「いかにもふるき」。

虫

虫鳴や表町は夜も人通り (寛政五年)

出典 寛政句帳(寛政5)

⑨ 前書「市中閑居」(句の上白に記す)。

虫なくやきのふは見えぬ壁の穴 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・7)

㊤ 中七「きのふは見へぬ」。

青い虫茶色な虫よ庵の夜は (文化十四年)

出典 七番日記(文化14・7)

㊤ 七番日記(文化11・9)、中七以下「茶色な虫の鳴にけり」。

虫鳴やわしらも口を持た逆 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・8)

㊤ 座五「持たとて」。梅塵本八番日記(文政3)、「むし鳴や草鞋も口を持たとて」。

放屁虫

屁ひり虫爺が垣根としられけり (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・7)・稿本発句題叢・希杖本句集

㊤ 七番日記、中七「爺がかきねと」。板本発句題叢、座五「しられける」。希杖本句集、座五「知られけり」。

蓑虫

蓑虫や梅に下るはかれが役 (文化六年)

出典 文化三—八年旬日記写(文化6)

㊤ 文化六年旬日記(3月)、中七以下「花に下るは己が役」。

蛸

日ぐらしや我影法師のあみだ笠 (寛政—年)

出典 (西国)
寛政紀行書込(寛政7)

日ぐらしや急に明るき湖の方（文化五年）

出典 文化五・六年旬日記（文化6・7）

㊟ 中七「急に明き」。

日ぐらしやあかるい方のおとし水（文化五年）

出典 文化五・六年旬日記（文化6・7）

蛸やついつい星の出るやうに（文化十二年）

出典 七番日記（文化12・5）

㊟ 中七「ついで星の」。

けふの日もあゝ蛸に鳴れけり（真蹟）

㊟ 八番日記（文政4・7）、上五・中七「けふもくあゝ蛸に」。

つくつく法師

今尽る秋をつくつくぼうし哉（文化三年）

出典 文化句帳（文化3・7）

㊟ 中七以下「秋をつくく^{（ふ）}ぼうし哉」。前文「刀七本さしたる法師武者、或は法師のふり袖、先今「め」かぬ心ち也。いづの頃より始りけん。」。

蜻蛉

夕日影町一ぱいのとんぼ哉（寛政一年）

出典 ^{（西園）}寛政紀行書込（寛政7）

そば所と人はいふ也赤蜻蛉（文化四年）

出典 連句稿裏書 (文化4)

夕汐や草葉の末の赤蜻蛉 (文化七年)

出典 七番日記 (文化7・7)

蜻蛉や尻にてなぶる大井川 (随斎筆記)

出典 随斎筆記 (文政4・5)

㊤ 八番日記 (文政4・7)、上五・中七「蜻蛉の尻でなぶる「や」」。同日記 (4・9)・文政句帳 (文政6・9)・句稿消
息 (補遺)、「蜻蛉の尻でなぶるや」。

御祭の赤い出立の蜻蛉哉 (文化十四年)

出典 七番日記 (文化14・8)

㊤ 文政版発句集・嘉永版発句集、上五「御祭に」。文政版発句集、座五「とんぼかな」。嘉永版発句集、座五「とんぼかな」。
八番日記 (文政4・7)、「御祭に蜻蛉も赤い出立かな」。

蜉

蜉が髭をかつぎて鳴にけり (文化九年)

出典 七番日記 (文化9・8)

鈴虫

虫も鈴ふるや住吉大明神 (文政三年)

出典 八番日記 (文政3・8)・だん袋・発句鈔追加

㊤ だん袋、前書「文政三年八月三日夜」。文政句帳 (文政7・12)、中七以下「ふる也家内安全と」。

蝨

枯れぐの野辺に恋する蝨哉 (文化七年)

出典 七番日記 (文化7・10)

㊤ 上五「枯ぐの」。文化三十八年旬日記写 (文化7)、上五・中七「かれぐの中に恋する」。

蝨々飛ぶぞ世がよい世がよいと (文政三年)

出典 八番日記 (文政3・9)

㊤ 「蝨々がとぶぞ世がよいぐと」。

大水に命冥加のいなご哉 (文政八年)

出典 文政句帳 (文政8・7)

菰

我死なば墓守となれきりぎりす (寛政一年)

出典 ^(西国) 寛政紀行書込 (寛政7)

㊤ 座五「きりぐす」。

きりぎりすなくも一つ聞きひとり哉 (寛政一年)

出典 ^(西国) 寛政紀行書込 (寛政7)

㊤ 上五・中七「きりぐすなくも一ッ聞も」。

きりぎりす隣に居ても聞へけり (文化元年)

出典 文化句帳 (文化1・8)

㊤ 上五「きりぐす」。座五「聞へけり」。

夕汐や塵にすがりてきりぎりす (文化七年)

出典 七番日記(文化7・7)

㊟ 座五「きりくす」。

出て行ぞ仲よく遊べきりぎりす (文化八年)

出典 七番日記(文化8・9)

㊟ 座五「きりくす」。

又も来よ膝をかさうぞきりぎりす (文化九年)

出典 七番日記(文化9・7)

㊟ 座五「きりくす」。

おとなしく留守をしてゐる菫 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・5)・志多良・句稿消息・発句鈔追加

㊟ 七番日記、中七「留主をしていろ」。^(㊟)志多良、前書「柏原の草庵の荒なんことを思やりて」。中七「留主をしていろ」。^(㊟)句稿消息、前書「旅立」。中七「留主をしていろ」。発句鈔追加、中七以下「留守をして居よ蟋蟀」。

おゝさうじや逃るがかちぞきりぎりす (文化十年)

出典 句稿消息(文化10)・七番日記(文化13・7)

㊟ 句稿消息、「おゝさうじや逃るがかちぞ^(㊟)や^(㊟)蟹」。「おゝさうじや逃るがかちぞきりくす」の二句に、「御看定奉希候」と記す。七番日記、「おゝさうじや逃るが^(㊟)ちぞ菫」。^(㊟)志多良(文化10)、中七以下「逃るがかちぞや^(㊟)蟹」。

けふまではまめで鳴たよきりぎりす (文化十年)

出典 七番日記(文化10・9月10月の部)・志多良・句稿消息・文政版発句集・嘉永版発句集

㊟ 七番日記、上五「けふ迄は」。座五「きりくす」。志多良・句稿消息、前書「九月尽」。上五「けふ迄は」。座五「きり

くす。文政版発句集、前書「九月尽」。上五「けふまでは。座五「きりくす」。嘉永版発句集、「前書「九月尽」。上五「今日までは」。座五「きりくす」。

寝返りをするぞそのけ菰 (文化十三年)

出典 七番日記 (文化13・7)

㊤ 文政版発句集・嘉永版発句集、「寝がへりをするぞ脇よれきりくす」。

我もはや五十そこぞきりぎりす (文化十三年)

出典 未詳

行燈にちよいと鳴けり菰 (文政元年)

出典 七番日記 (文政1・7)

㊤ 七番日記 (文化14・7)、中七以下「ちよつと鳴けり青い虫」。

菰かがしの腹で鳴にけり (文政二年)

出典 八番日記 (文政2・11)

㊤ 中七「かゝしの腹で」。

ばつた

ばつたばつたりとぶぞ世がよい世がよいと (文政三年)

出典 未詳

蟪蛄

其分にならぬくと蟪蛄哉 (文政四年)

出典 八番日記 (文政4・9)

⑤ 座五「蟪蛄（蟪蛄）哉」。
蚯蚓鳴く

細る也蚯蚓の唄も一夜づつ (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・7)

⑥ 座五「一夜づつ」。

洑 鮎

さくら葉もちらりくや鮎さびる (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・閏8)

鰯

鰯めせめせとや泣子負ひながら (文政二年)

出典 八番日記(文政2・6)

⑦ 前書「越後女の哀〔れ〕さを」。中七「くとや泣子」。おらが春、前書「越後女、旅かけて商ひする哀〔れ〕さを」。
「麦秋や子を負ながらいはし売（む）」。発句鈔追加、前書「越後女の旅かけて商する哀〔れ〕さは」。中七「めせとて泣子」。

草の花

草花や行よい門のいく所 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・8)

親の日と思ばかりぞ草の花 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・8)

瘦草のよろ／＼花と成にけり (文化十年)

出典 七番日記（文化10・8）・志多良

㊤ 句稿消息、上五「瘦草も」。

馬の子や横にくはへし草の花（文化十二年）

出典 七番日記（文化12・8）

㊤ 中七「横に加へし」。[㊤]「おらが春、上五「鹿の子や」。座五「萩の花」。

末 枯

末枯や木辻も古き山つづき（文化元年）

出典 文化句帳（文化1・9）

㊤ 座五「山つづき」。

末枯や諸勸化出さぬ小制札（文化元年）

出典 七番日記（文政1・9）

㊤ 前書「当村早魃にて」。文政版発句集、前書なし。中七「諸勸化入れぬ」。嘉永版発句集、前書なし。中七「諸勸化入れぬ」。

末枯や新吉原の小行燈（文化十年）

出典 七番日記（文化10・9）

㊤ 七番日記（文化・9）、「吉原も末枯時の明りかな」。

人足の末がれにけり王子道（文政五年）

出典 文政句帳（文政5・8）

㊤ 上五「人足「の」」。

菊

柴門の藪の中迄小菊哉 (文化元年)

出典 文化句帳 (文化1・9)

菊咲て朝梅千の風味哉 (文化二年)

出典 文化句帳 (文化2・閏8)

菊咲や赤袖口も日のさして (文化二年)

出典 文化句帳 (文化2・閏8)

㊦ 前掲句の直前に出。

薄菜汁菊も追く咲にけり (文化三年)

出典 文化句帳 (文化3・9)

門口や赤い小菊も一むしろ (文化十年)

出典 七番日記 (文化10・9)

菊咲や茂介仏も願がきく (文化十一年)

出典 七番日記 (文化11・8)

金蔵を日除にしたり菊の花 (文化十一年)

出典 七番日記 (文化11・10)

人間がなくば曲らじ菊の花 (文化十四年)

出典 七番日記 (文化14・9、文政1・9 重出)・希杖本句集

筆持た童子いくつぞ菊の花 (文化十四年)

出典 七番日記（文化14・9）

菊咲や山の天窓も白くなる（文化十四年）

出典 七番日記（文化14・9）

菊ぞのや女ばかりが一床几（文政元年）

出典 七番日記（文政1・9）

勝菊は大名小路もどりけり（文政元年）

出典 七番日記（文政1・9）・だん袋

⑤ 八番日記（文政3・9）、上五「勝菊の」。座五「帰りけり」。文政版発句集・嘉永版発句集、上五「勝た菊」。座五「通りけり」。

菊園や歩きながらの小盃（文政二年）

出典 八番日記（文政2・9）・おらが春

⑥ 嘉永版発句集、座五「小酒盛」。

藪菊や畠の縁の茶呑道（文政二年）

出典 八番日記（文政2・9）

⑦ 中七「畠の縁（り）の」。前掲「菊園や」の三句前に出。

菊作菊より白きつむり哉（文政二年）

出典 八番日記（文政2・9）

⑧ 中七「きくより白き」。梅塵本八番日記（文政2）、座五「つむり哉」。

歙さげて神農顔や菊の花（文政二年）

出典 八番日記(文政2・9)・おらが春・発句鈔追加

㊤ 八番日記、前掲「菊作」の七句前に出。おらが春、前書「九月十六日正風院菊会」。発句鈔追加、前書「九月十六日正風院魚淵菊会」。全集本発句篇、「神農」を「新農」と誤る。

開山は芭蕉さま也菊の花 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・9)

㊤ 前掲「鍛さげて」の直前に出。

小菊なら縄目の耻はなかるべし (文政二年)

出典 八番日記(文政2・9)・おらが春

菊咲や二夜泊りし下々の客 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・9)

野菊

はなやかに旭のかかる野菊哉 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・8)

㊤ 中七「旭のかゝる」。

足元に日のおちかかる野菊哉 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・8)

㊤ 中七「日のおちかゝる」。前掲「はなやかに」の二句前に出。

桔梗

きりきりしやんとしてさく桔梗哉 (文政七年)

出典 七番日記(文化9・8)・板本発句題叢・文政版発句集・嘉永版発句集

㊤ 「きりきり」は、いずれも「きり／＼」。嘉永版発句集、「咲桔梗哉」。稿本発句題叢、「きり／＼しやんで咲く」。

朝顔

朝顔やしたたかぬれし通り雨 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・7)

朝顔や女車の毛唐人 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・8)

㊤ 前書「有女同車」。

薺のかぞへる程に成にけり (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・閏8)

薺やまだ片づかぬやけ瓦 (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・7)

薺や朝／＼蚤の逃所 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・8)

摺鉢の音に朝顔咲にけり (文化十二年)

出典 七番日記(文化12・6)

㊤ 上五「雷鉢」。^(摺)前書「廿二晴、ケノ庭薺」。

朝顔やまだ精進の十五日 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・8)

② 中七「まだ」精進の」。梅塵本八番日記(文政3)、中七「まだ精進の」。

朝顔の上から取や金山寺 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・7)

③ 八番日記(4・7)、中七以下「外から呼や経山寺」。^(註) だん袋、前書「江戸」。中七以下「上から買ふや経山寺」。文政版発句集・嘉永版発句集、中七以下「上からとるや経山寺」。

朝顔に涼しくくふやひとり飯 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・11)

女郎花

よろ／＼は我もまけぬぞ女郎花 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・3)

女郎花あつけらこんと立りけり (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・閏8)・希杖本句集・文政版発句集・嘉永版発句集

④ 嘉永版発句集、中七「あつけらかと」。

蔦

松の蔦紅葉してから伐られけり (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・8)

萩

小笠きて東坡めく也萩の花 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・8)

此所またげと萩の咲にけり (文化十一年)

出典 七番日記 (文化11・7)

猫の子のかくれんぼする萩の花 (文化十一年)

出典 七番日記 (文化11・9)

秋萩や一斗こぼれて一斗咲 (文政四年)

出典 八番日記 (文政4・9)

㊤ 上五「萩萩や」。(秋カ) 中七「一斗こぼれ〔て〕」。梅塵本八番日記、上五「萩萩や」。(秋カ) 中七「一斗こぼれて」。

萩 寺

編笠の窓から見るや萩の花 (文政六年)

出典 文政句帳 (文政6・9)

鼠尾草

みそ萩や水につければ風の吹 (文化元年)

出典 文化句帳 (文化1・7)・板本発句題叢

㊤ 稿本発句題叢、「ミそ萩や水ニ浸せバ風が吹」。発句鈔追加、上五「鼠尾草や」。座五「風が吹く」。嘉永版発句集、上五「鼠尾草や」。座五「風が吹」。全集本、「鼠尾草」に「そびぐさ」とルビ。

鶏 頭

ぼつ／＼と瘦けいとうも月夜也 (文化元年)

出典 文化句帳 (文化1・8)

㊤ 中七「瘦けイタウも」。(ト)

蕎麦の花

近い頃しれし出湯やそばの花 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・9)

㊤ 上五「近い比」。

しなのぢやそばの白さもぞつとする (文化十四年)

出典 七番日記(文化14・8)

㊤ 文政句帳(文政7・11)、上五「山畠や」。文政版発句集・嘉永版発句集、前書「老の身は今から寒さも苦になりて」。上五・中七「山畠や蕎麦の白さも」。

蓼の花

新らしい流灌頂や蓼の花 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・9)

㊤ 上五「新しへ」。

稲

稲かけし夜より小藪は月夜哉 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・8)

稲の香やかさい平のばか一里 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・6)

㊤ 中七「カサイ平の」。

夕月や大くとして稲の花 (文化七年)

出典 文化三十八年句日記写 (文化7)

天皇の袖に一房稲穂哉 (文化十一年)

出典 七番日記 (文化11・9)

日やけ田も花で候とてそよぐぞよ (文化十四年)

出典 七番日記 (文化14・8)・希杖本句集

㊤ 希杖本句集、前書「干魃」。

日本の外が浜迄おち穂哉 (文政元年)

出典 七番日記 (文政1・12)・文政版発句集・嘉永版発句集

㊤ 文政版発句集・嘉永版発句集、前書「米穀下直にて下々なんぎなるべしとは、こと国の人うらやましからん」。七番日記・嘉永版発句集、中七「外ヶ浜迄」。

旅人の藪にはさみし稲穂哉 (文政五年)

出典 文政句帳 (文政5・8)

㊤ だん袋、上五・中七「旅人が藪ニはさみし」。文政版発句集・嘉永版発句集、中七以下「垣根にはさむおち穂哉」。

早稲の香や夜さりも見ゆる雲の峰 (文政五年)

出典 文政句帳 (文政5・4、8 重出)

籾

ひつち田や青みにうつる薄氷 (寛政四年)

出典 寛政句帳 (寛政4)

㊤ 全集本発句篇、この句「文政句帳 政七」と誤る。

鬼灯

鬼灯や七つ位の小順礼 (文政三年)

出典 梅塵本八番日記 (文政3)

唐辛子

寒いぞよ軒の蛸唐がらし (文政一年)

出典 句稿消息 (文化五前後カ)

芒

一念仏程申しく芒哉 (文政二年)

出典 八番日記 (文政2・8)

㊤ 中七「申程して。おらが春、前書「七月七日墓詣」。中七「申だけしく」。だん袋、前書「山家の墓詣七月七日」。「念仏を申だけ敷く芒かな」。発句鈔追加、前書「七月七日山家の墓詣」。「念仏を申だけしくすゝき哉」と次句の行間に、中七以下「申だけしくすゝき哉」。

うら窓に雨打つけるすすき哉 (文政五年)

出典 文政句帳 (文政5・8)

㊤ 座五「すゝき哉」。

散芒寒くなるのが目にみゆる (文政七年)

出典 稿本発句題叢 (文政3以前)・希杖本句集・嘉永版発句集

㊤ 稿本発句題叢・希杖本句集、中七「寒く成のが」。七番日記 (文政1・7)、中七「寒く成つ「た」が」(句の前に「再案」)。板本発句題叢・発句鈔追加、上五・中七「ちる芒夜の寒さが」。

芦の花

芦の穂やあんな所にあんな家 (文化十一年)

出典 七番日記 (文化11・9)

㊤ 中七「あん「な」所に」。

紅葉

うかうかと出れば日暮紅葉哉 (文化元年)

出典 文化句帳 (文化1・9)

㊤ 上五・中七「うぢぐ」と出れば日暮「る」。

木啄も日の暮かかる紅葉哉 (文化元年)

出典 文化句帳 (文化1・9)

㊤ 中七「日の暮かゝる」。

大寺の片戸さしけり夕紅葉 (文政版発句集)

出典 文政版発句集・嘉永版発句集

㊤ 七番日記 (8・9)、上五・中七「大寺や片く戸さす」。

欠腕も同じ流や立田川 (文政五年)

出典 文政句帳 (文政5・8、12Ⅱ重出)

㊤ 文政5・12、前書「紅葉浮水」。

海晏寺お茶屋

竈の下へはき込む紅葉哉 (文政五年)

出典 文政句帳 (文政8・10)

㊦ 前書「海安寺^(奥)お茶屋」。

柿紅葉

立曰よ寝曰よさては柿紅葉 (文化十二年)

出典 七番日記 (文化12・8)

馬の子の口さん出すや柿紅葉 (文政元年)

出典 七番日記 (文政1・9)

㊦ 上五「馬の子^(が)や」。

棉の穂

畠からつまんでやるや綿勸化 (文政四年)

出典 八番日記 (文政4・9)

㊦ 座五「綿勸化^(勸)」。梅塵本八番日記、座五「綿勸化」。発句鈔追加、中七「つかんでやるや」。

柳散る

雲低き夕々や柳ちる (文化二年)

出典 文化句帳 (文化2・7)

桐一葉

朝くせのばら／＼雨や桐一葉 (文化五年)

出典 文化五・六年旬日記 (文化5・7)

㊦ 上五・中七「朝クセのはらはら雨や」。

きり一葉二は三は四はせはしなや (文化九年)

出典 七番日記(文化9・7)

三日月の細き際より一葉哉 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・7)

㊤ 上五「三ヶ月の」。

柿

渋柿と鳥も知て通りけり (文政三年)

出典 八番日記(文政3・9)

柿の木であいと答へり小僧哉 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・9)・文政版発句集・嘉永版発句集

㊤ 中七「あえ^(い)「と」^(い)こたいる」。

石榴

妙法の声に口あくざくろ哉 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・9)

㊤ 中七「声^(い)「に」口あく」。

木 槿

朝ばかり日のとどく溪のむくげ哉 (寛政——年)

出典 ^(西園)寛政紀行書込(寛政7)

㊤ 前書「緑樹の月に水は染りて」。中七「日のとどく溪の」。

うか／＼と出水に逢し木槿哉 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・9)・稿本発句題叢・希杖本句集・発句鈔追加・嘉永版発句集

㊤ 発句題叢・希杖本句集・嘉永版発句集、中七「出水ニ逢ひし」。

浦向に咲かたまりし 権哉 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・7)

酒冷すちよろ／＼川の権哉 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・7)

秋霜に又咲ほこるむくげ哉 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・7)

木権さくや親代々の細けぶり (文化九年)

出典 七番日記(文化9・7)

葡萄

一番の不二見所や葡萄棚 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・閏8)

㊤ 前書「甲州」。

糸瓜

糸瓜蔓切つてしまへばもとの水 (文政七年)

出典 未詳

㊤ 『一茶俳句集』に、「雪女離縁の時の作なり」と注。発句鈔追加、前書「離別」。句「へちまつる切て支舞は他人哉」。ゆき女との離縁は、文政七年八月三日(文政句帳)。

西 瓜

正直ね段ぶつけ書の西瓜哉 (文政八年)

出典 文政句帳 (文政8・7)

㊤ 上五・中七「正直」値「段ぶ」つけ書の。

烏 瓜

秋風の吹ともなしや烏瓜 (文化五年)

出典 文化五・六年旬日記 (文化6・7)

木の実

山姫の袖より落る木の実哉 (文化七年)

出典 七番日記 (文化7・9)

㊤ 座五「木実哉」。

夕暮や木の実が笠をうつ山 (文政五年)

出典 文政句帳 (文政5・12)

㊤ 中七「木」の「実が笠を」。文政句帳 (文政5・8)、上五・中七「夕やみや木の実も人を」。

団 栗

団栗や而後露時雨 (文化五年)

出典 文化五・六年旬日記 (文化6・7)

団栗の寝ん／＼ころり／＼哉 (文政二年)

出典 八番日記 (文政2・9)

栗

柴栗のゑむといふ日もなかりけり (文化五年)

出典 文化五・六年旬日記 (文化6・7)

㊤ 中七「エムといふ日も」。

拾われぬ栗の見事よ大ききよ (文化十年)

出典 七番日記 (文化10・9)

㊤ 前書「小布施」。

茹栗や胡坐巧者なちいさい子 (文化十三年)

出典 七番日記 (文化13・8)

㊤ 座五「ちいさい子」。

迹の人三つ栗三つひろひけり (文政二年)

出典 八番日記 (文政2・4)

㊤ 中七「三ツ栗三ツ」。八番日記「文政2・9」、「三ツ栗〔を〕三ツ拾ふや迹人」。

おち栗や仏も笠をめして立 (文政四年)

出典 八番日記 (文政4・9)

ゆで栗や夜番の小屋の俄客 (文政五年)

出典 文政句帳 (文政5・8)

菌

小坊主に高名されし茸哉 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・9)

松茸や犬のだくなくもかぎ歩く (文政四年)

出典 八番日記(文政4・9 重出)・たねおろし・発句鈔追加・茶翁連句集

㊦ たねおろし、前書「遊林寺」。発句鈔追加・茶翁連句集、前書「遊寺林」。これを立句として、『たねおろし』には第三まで、『茶翁連句集』には九句までを収める。

海見ゆる芝に坐どるや焼菌 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・8)

冬

十月

水道町にて

十月やほのくかすむ御綿売 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・10)

㊦ 前書「八日、水道町にて」。

十月の中の十日を茶の湯哉 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・10)

㊦ 座五「茶湯哉」。七番日記(7・11)、中七以下「中の十日の霰哉」。七番日記(12・10)、中七以下「中の十日の寝坊哉」。

十月やうらからをがむ浅草寺 (文化十二年)

出典 七番日記 (文化12・10)

㊦ 中七「うらからおがむ」。

十二月

けろく／＼と師走月よの榎哉 (享和三年)

出典 享和句帳 (享和3・11)

冬至

雪ちらりく／＼冬至も梅の咲にけり (文化十一年)

出典 未詳

㊦ 八番日記 (文政2・12)、「雪ちらりく／＼冬至の祝義哉」。

寒の入

さす月のぼんの凹から寒が入 (文化十三年)

出典 七番日記 (文化13・10)

㊦ 上五・中七「さす月〔の〕ボンの凹から」。

和やかな寒が入る也京の町 (文政七年)

出典 文政句帳 (文政7・12)

㊦ 上五「和らかな」。

寒

身に添ふや前の主の寒迄 (寛政十年)

出典 文政版発句集・嘉永版発句集

㊤ 文政版発句集・嘉永版発句集、上五「身に添や」。「茶翁終焉記」、「身にしむや前のあるじの寒さまで」。文政版発句集・嘉永版発句集、「上野の麓に蝸牛のから家かりて」ではじまる文の後にこの句を添え、「文化六年十二月十五日」と記す。

井戸にさへ錠のかかりし寒哉 （享和三年）

出典 享和句帳（享和3・11）

㊦ 中七「錠のかゝりし」。

立砂十三回忌、墓前にて

生残りくたる寒さ哉 （文化八年）

出典 我春集（文化8・11）

㊧ 「立砂十三回忌、墓前にて」は、井泉水の注記。「立砂翁……十三回忌といふけふ、はからずも巡り来ぬることのふしぎさに」、「墓の前にて手向心の十三句也……」の小文の間に収む。七番日記、文化八年十一月二十日の条に、「馬橋ニ入、立砂十三回忌」とある。

寒き日や鎌ゆひ付し竿の先 （文化九年）

出典 七番日記（文化9・11）

臼井峠

しなのちの山が荷になる寒哉 （文化九年）

出典 七番日記（文化9・11）

㊨ 前掲句の二句前に出。句稿消息、中七「雲が荷になる」。

あばら骨あばらに寒き夜也けり （文化十二年）

出典 七番日記（文化12・8）

㊦ 中七「あばらに寒〔き〕」。

古盆の灰で手習ふ寒さ哉 (文化十三年)

出典 七番日記 (文化13・11)

㊦ 座五「寒〔さ〕哉」。

狼の糞を見てより草寒し (文政元年)

出典 七番日記 (文政1・12)

㊦ 八番日記 (文政2・9)、中七以下「糞(を)さいそぞろ寒かな」。おらが春、「狼は糞ばかりでも寒〔さ〕哉」。自筆句集、「狼は糞を見てさへ寒〔さ〕哉」。

自像にいふ

ひいき目に見てさへ寒きそぶり哉 (文政元年)

出典 文政二年十二月二十二日付文路あて書簡・文政版発句集・嘉永版発句集

㊦ 文政版発句集、前書「おのれがすがたにいふ」。嘉永版発句集、前書「おのが姿にいふ」。七番日記 (文政1・12)、前書「自像」。座五「天窓哉」。

一文に一つ鉦うつ寒かな (文政二年)

出典 八番日記 (文政2・10)・嘉永版発句集

㊦ 八番日記、中七「一ツ鉦うつ」。嘉永版発句集、中七以下「一ツ鉦打寒さかな」。八番日記、この句の直前に、中七以下「一ツツツかよ寒念仏」。

江戸道中

掠鳥と人に呼るる寒哉 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・11)・おらが春・だん袋・自筆句集・発句鈔追加・文政三年九月十四日付斗圍あて書簡

㊤ 中七「人に呼るゝ」。おらが春、前書「東に下らんとして、中途迄出たるに」。だん袋、前書「中山道」。自筆句集、前書「大連にて臼井越る」。発句鈔追加、前書「東に下らんとして途中迄出るに、中仙道にて」。座五「さぶさかな」。

水風呂の口で裾ぬふ寒哉 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・11)

一人と帳面につく寒かな (文政七年)

出典 さびすなご(文政七板)

㊤ 七番日記(文政1・7)、中七以下「帳に付たる夜寒哉」。

庵の夜は寒し破るるほどの柱 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・12)

㊤ 上五・中七「庵の夜や寒し破るゝ」。

凍る

凍とけぬうちに参るや善光寺 (文化十四年)

出典 七番日記(文化14・11)

㊤ 中七「うちに参や」。文政句帳(文政6・11)、上五・中七「朝凍のうちに参るや」。

小春

麦ぬれて小春月夜の御寺哉 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・9)

ふる雨も小春也けり知恩院 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・9)・嘉永版発句集・俳諧千題集

㊤ 嘉永版発句集、上五・中七「降雨も小はるなりけり」。文化句帳、前掲句の直前に出。
けふもくく小春の雉子哉 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・10)・文化十年句文集

石橋の奉加幟の小春哉 (文化十二年)

出典 七番日記(文化12・10)

杖ほくく拾ひ日和の小春哉 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・11)

独居るだけの小春や窓の前 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・11)

㊤ 前掲句の直前に出。

年の暮

斧の柄の白きを見ればとしの暮 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・10)

㊤ 前書「伐柯」。

日本の年がおしいかおろしや人 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・12)

㊤ 中七「年がおしいか」。

耕さぬ罪もいくばく年の暮 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・12)

けふに成て家売られけり年の暮 (文化五年)

出典 文化五六年句日記(文化5・12)

㊦ 中七「家取れけり」。

行く年を元の家なしと成にけり (文化五年)

出典 文化五・六年句日記(文化5・12)

㊦ 上五「行年を」。座五「成」にけり。前掲句に併記。

行としや空の青さに守谷迄 (文化七年)

出典 我春集

㊦ 右肩に「去十二月廿三」と付し、これを立句とした一茶・鶴老・天外の三吟歌仙を収む。七番日記(文化7・12)、前書「廿三日西林寺に入」。中七「空の名残を」。発句鈔追加、前書「木枯の瘦歴とばして相馬なる籠山に吹込む、日は師走の二十三日なりけり」。中七「空の名残を」。

わらの火のめら／＼暮ることし哉 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・11)

行としや身はならはしの古草履 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・12)

藪先や暮行としの烏瓜 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・12)

㊦ 前掲句の十三句前に出。

行年に手をかざしたる馳かな (文化七年)

出典 七番日記(文化10・閏11)

梟よのはほん所かとしの暮 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・12)

㊦ 中七「のほん所か」。

行年や覚一つと書附木 (文化十二年)

出典 七番日記(文化12・10)・自筆句集

㊦ 中七「覚一ツと」。

羽生へて錢がとぶ也年の暮 (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・12)・発句鈔追加(末尾に収めた「俳諧寺記」に)・文政三年十二月八日付春甫・掬斗・素鏡・

雲士あて書簡(この書簡に記す「俳諧寺記」の末尾にこの句を収む)。

㊦ 上五「羽生^(え)へて」。座五「としの暮」。

ともかくもあなた任せのとしのくれ (文政二年)

出典 おらが春・文政版発句集・嘉永版発句集

㊦ おらが春、座五「としの暮」。嘉永版発句集、座五「年の暮」。

うつくしや年暮きりし夜の空 (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・12)

㊦ 発句鈔追加、中七以下「年暮きつた夜のそら」。

行としや降ろともままの皮頭巾 (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・10)

㊤ 中七「降ろともまゝの」。

大年

むら竹や大晦日も夜の雨 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・12)

大年の日向に立る榎哉 (文化五年)

出典 文化5・六年旬日記(文化5・12)

大年や雀が藪の大日和(文化五年)

出典 文化5・六年旬日記(文化5・12)

卅日やそれ梅も咲く餅もつく (文化九年)

出典 七番日記(文化9・11)

五十二の坂を越るぞやつこらさ (文化十年)

出典 句稿消息(文化11)

㊤ 句稿消息、上五「六十の」を朱にて消し「五十二の」。中七「越す夜ぞ」を朱にて消し「越るぞ」。七番日記(文化10・閏11)、上五「六十の」。自筆句集、上五「七十の」。座五「やつとこな」。発句鈔追加、上五・中七「六十の坂を越夜ぞ」。

かすむぞや大卅日の寛永寺 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・閏11)・句稿消息

かくれ家や大卅十日も夜の雪 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・12)

㊦ 自筆句集、「かくれ家は大卅日の日永哉」。

商万錢者日有苦商一錢者日有楽

笛吹て大卅日を飴の鳥 (花見の記)

出典 未詳

㊦ 「花見の記」(文化5・3、一茶叢書その他に翻刻)にこの句はない。

冬の月

外堀の割るる音あり冬の月 (寛政四年)

出典 寛政句帳(寛政4)

㊦ 中七「割るゝ音あり」。

遠望

冬の月いよ／＼伊与の高根哉 (寛政六年)

出典 寛政句帳(寛政6)

㊦ 中七「いよ／＼伊与の」。

鶯の寝所見ゆる冬の月 (文化十二年)

出典 七番日記(文化12・11)

㊦ 中七「寝所見る」。「寝所」を「見る」。

我はけば音せる下駄ぞ冬の月 (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・10)

深川をすもどりす也冬の月 (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・12)

石切のかち／＼山や冬の月 (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・10)

寒 月

小盲や身を寒月になして行 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・11)

息杖や石原道を寒の月 (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・10)

寒月やむだ呼されし座頭坂 (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・10)

㊤ 八番日記(文政2・10)・おらが春、「木がらしやから呼されし按摩坊」。

冬日和

家一つ畠も七枚冬日和 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・10)

㊤ 中七「畠七枚」。

時 雨

茶の水の川もそこ也初しぐれ (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・10)

我上にふりし時雨や上総山 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・10)

古郷に高い杉ありはつしぐれ (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・8)

寝所はきのふ葺けり初時雨 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・2)

㊤ 前書「養心莫善於寡欲」。

初時雨馬も御紋をきたりけり (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・10)

ばた餅の来べき空なり初時雨 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・10)・木槿集(文化10)・文政版発句集・嘉永版発句集

㊤ 七番日記、中七「来べき空也」。木槿集、上五・中七「牡丹餅の来べき空也」。嘉永版発句集、「牡丹餅の」。

誰ためにしぐれておはす仏哉 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・10)

㊤ 中七「シグレておはす」。七番日記(文化10・9)・自筆句集・文政版発句集・嘉永版発句集、上五「人のため」。八番

日記(文政4・12)、上五・中七「身代に時雨ておわす」。

初時雨俳諧流布の世也けり (文化七年)

出典 七番日記(文化7・10)

㊤ 上五「はつ時雨」。

鶯が親の迹追ふ初時雨 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・10)

今置し紅葉一本はつ時雨 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・10)

㊟ 上五「今置し」。

三といふ題

あれみさい松が三本初しぐれ (文化八年)

出典 七番日記(文化8・10)

㊟ 「廿七日、三といふ題」として、三句記す第二句。

しぐるるや軒にはぜたる梅もどき (文化八年)

出典 七番日記(文化8・11)

㊟ 上五「しぐるるや」。

柿一つつくねんとして時雨哉 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・11)

㊟ 七番日記(文化9・10)、上五「鶏頭の」。

牛島の牛も鳴べき初時雨 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・10)

㊟ 上五・中七「牛島の牛も鳴べき」。

米と錢篩ひ分けけり初時雨 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・10)

㊦ 中七「篩分けゝり」。

黒門やかざり手桶の初時雨 (文化十一年)

出典 七番日記 (文化11・10)

桑 名

蛤のつひのけぶりや夕時雨 (文化十一年)

出典 七番日記 (文化11・11)

芭蕉塚法楽

陶の杉の葉そよぐはつ時雨 (文化十二年)

出典 七番日記 (文化12・10)

㊦ 前書なし。「芭蕉塚法楽」は、次の句の前に入るべきものを誤ったか。

御宝前にかけ奉るはつしぐれ (文化十三年)

出典 あとまつり (文化13刊)・文政版発句集・嘉永版発句集

㊦ あとまつり、前書「法楽」。巻頭にこの句を立句とした一茶・魚淵の両吟歌仙。文政版発句集・嘉永版発句集、前書「桃青霊社」。座五「初しぐれ」。自筆句集、前書「桃青霊社」。上五「御宝前」。座五「時雨哉」。

干栗の珠数もいく連初時雨 (文化十三年)

出典 七番日記 (文化13・8)

㊦ 七番日記 (文化13・12)、中七「^(数珠)珠数も四五連」。

義仲寺はあれに候はつ時雨 (文化十三年)

出典 七番日記 (文化13・10)

婆がつく鐘さへみへて初時雨 (文化十三年)

出典 七番日記 (文化13・10)

㊤ 上五・中七「婆うがつく鐘さへみへて」。

大釜にそとば焚也夕時雨 (文化十四年)

出典 七番日記 (文化14・11)

㊤ 中七「ソトバ焚也」。

重箱の錢四五文や夕時雨 (文政二年)

出典 八番日記 (文政2・10)・おらが春・嘉永版発句集・発句鈔追加

㊤ 八番日記、前書「堂庭乞食」。おらが春、前書「善光寺門前憐乞食」。嘉永版発句集、前書「善光寺御堂庭乞食」。座五「夕しぐれ」。発句鈔追加、前書「善光寺堂前憐乞食」。

子を負て川越す猿や一しぐれ (文政二年)

出典 梅塵本八番日記 (文政2)・嘉永版発句集

㊤ 梅塵本八番日記、「子を負うて川越す猿や一時雨」。嘉永版発句集、「子を負うて川越す猿や一時雨」。風間本八番日記 (文政2・9)、「子を負うて」川越す旅や一しぐれ」。

時雨るや親枕たたく啞乞食 (文政二年)

出典 八番日記 (文政2・10)・嘉永版発句集

㊤ 八番日記、上五・中七「時雨うや親枕たうく」。嘉永版発句集、上五・中七「時雨うや親枕叩く」。

番丁やもやひ番屋の小夜時雨 (文政三年)

出典 八番日記 (文政3・2)

㊦ 座五「小〔夜〕時雨」。梅塵本八番日記(文政3)、「番町や最合番屋の北しぐれ」。

しぐるるやたばこ法度の小金原 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・10)

㊦ 上五「しぐるゝや」。

座敷から湯に飛入るや初時雨 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・11)・だん袋

㊦ 八番日記、中七「湯〔に〕飛入るや」。梅塵本八番日記(文政4)、前書「渋湯和泉亭にて」。中七以下「湯に飛込や初しぐれ」。だん袋、前書「田中」。中七以下「湯にとび入るやはつ時雨」。自筆句集、前書「田中」。中七「湯〔に〕とび込や」。発句鈔追加、前書「渋和泉舎」。中七「湯にとびこむや」。

丈たけの箕をかぶる子やはつ時雨 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・10)

神の木は釘を打れて時雨けり (文政六年)

出典 文政句帳(文政6・10)

㊦ 上五・中七「神木は釘を打れ〔て〕」。

大時雨小時雨大名小名哉 (文政六年)

出典 文政句帳(文政6・10)

㊦ 座五「小名かな」。

いざこさを雀もいふや村しぐれ (文政六年)

出典 文政句帳(文政6・10)

初時雨夕飯買に出たりけり (文政版発句集)

出典 文政版発句集・嘉永版発句集

② 嘉永版発句集、上五「初しぐれ」。

雀踏む程は菜もありはつ時雨 (嘉永版一茶発句集)

出典 稿本発句題叢(文政3以前)・発句鈔追加

② 稿本発句題叢、上五・中七「雀ふむ程は菜も有」。発句鈔追加、上五「雀ふむ」。

しぐるるや藪の中にも芭蕉塚 (真・蹟)

② 八番日記(文政4・12)、「しぐるるゝや芭蕉翁の塚まはり」。

△訂正▽ 第一四号所収稿(数字上・ページ数、下・行数)

52・4三〇六句↓三〇四句 55・1文政四年↓文政四年 55・2文化4・10↓文政4・10 57・2自筆本句集、前書「寛政五元日肥後八代正教寺にありて」(追加) 59・5空前↓窓前 61・6の次に8 62・5文化元年↓文化元年 62・6文化4・1↓文化1・1 65・5文政3・1↓文政3 67・15文政3・1↓文政3 68・15文政3↓文政3 74・10日の長き↓日の長さ 74・12抹消 85・13嘉永版発句集(追加) 85・15自筆本句集、前書「椿所不踰矩」↓抹消 87・16「文政版発句集」の前に「浅黄空」(追加) 88・10「嘉永版発句集」の前に「浅黄空」(追加)